

E・A・ガーガン著『中国の挑戦』

東京外務大教授 中嶋嶺雄

日本外交にとっての大きな課題であった天皇訪中も終わった。だが、そのことよって、日本にとっての中国が従来より以上にわかりやすい対象になったのかどうか、と問うたとき、肯定的な答えがすぐに戻ってくるとはいえない。

過渡期の中国共産党第十四回大会で「社会主義市場経済」を標榜した中国が、この先どんな道筋をたどるのかについても、断定的なことはいえないような気がする。

建国後の党大会のヒーローをとってみても、八回大会（一九五六年）の劉少奇、九回大会（一九六九年）の林彪、十回大会（一九七三年）の王洪文、十一回大会（一九七七年）の華國鋒、十二回大会（一九八二年）の胡耀邦、十三回大会（一九八七年）の趙紫陽と、そのすべてが批判される。



失墜していることを見れば、まさに今次大会は、鄧小平の大会でもあっただけに、ポスト鄧小平時代になつてみないと、結論が出せないのではないか。

本書は、一九八六年から八八年ま

で、ニューヨーク・タイムズの北京支局長をつとめた著者が、そのように不可解な中国の政治社会の内面に身を沈めることよって、この国の深部の潮流を探ろうとした野心的なルポルタージュである。

冒頭から著者は、中国の官許知識人、郭沫若によつて『反動的ポルノ作家』と断定された無名の作家・沈從文との出会いを語り、彼を「今世紀中国のもっとも偉大な作家」として位置づけている。

ここにも見られるように本書は、改革・開放に沸く当今の中国社会の表面をなぞるのではなく、「腐蝕した政治、経済の現状から引き起こされた不確かさと紛争により難破している中国」を描こうとしている。

そのことは、話題になったテレビ・ドキュメンタリー『河殤』（蘇曉康・王魯湘作）に言及して、この作品が反響を呼んだのは、それが「中国人の意識を直撃した力」にあったと論じ、中国人のアイデンティティの危機を浮き彫りにしている点にも表わされている。

改革・開放下で「売春に走る娘たち」の実態を報じたルポなどは、やや平板に思われたが、「チベットの悲劇」を伝える著者の筆鋒は鋭く、みずから体験した天安門「血の日曜日」事件のルポも生々しい。

「天安門の虐殺は、中国の実験の一

〇年、希望の一〇年に終止符を打った。……天安門は、一九八〇年代の改革のプロセスによつて束縛を解かれた経済的、政治的力と、国を統治する生来硬直した非妥協的共産党との不可避的衝突であった」

と著者はいう。だとすれば、右手に改革・開放、

シンクタンク・レポートを読む 息子は父とスポーツをしたがっている 父と子のスポーツ・コミュニケーション調査

富士銀行

●スポーツで子供とスキンシップ
「できれば、子供といつも一緒に遊んでやりたいのだが、仕事が忙しくてね」と弁解する父親は多い。それなら、時間的なゆとりができたなら、どんな遊びに付き合ってやれるか。どんな遊びを一緒にしてやれば子供は喜ぶと思うか。小学校高学年の子供を持つ首都圏の父親は、こう考えている。

「男の子の場合、一にゲーム、二に外食かスポーツ（観戦も含む）。女の子は一に旅行、二に買い物、三が勉強の面倒をみることに」
では、子供のほうはどう考えているのか。男の子の場合、ゲームは二位（二二・七％）、外食は三位（二五・三％）で、一位はスポーツ（三三・一％）である。二位のゲームに一〇％近い差をつけているところを見ると、子供たちは案外、外で父親と「男の遊び」をしたがっているらしい。

女の子はどうか。「旅行が一番楽しい」と考えている点では親子とも共通で問題ないが、「買い物」については、父親が考えているほど子供は喜んでおらず、順位としては五位で、旅行とは一五％以上の隔たりがある。彼女たちは買い物よりもむしろ勉強をみてもらうほうを歓迎している。

父親は自分の子供時代の経験から、男の子と一緒にするスポーツの効用を「スキンシップに役立つ」「共通の話題ができる」「子供の成長を確かめられる」と考えているのに対し、子供のほうは「やり方を教えてくれる」（四一・三％）、「いろいろと話をしてくれ」（三三・三％）、「真剣に相手をしてくれる」（二八・七％）ことが嬉しいと答えている。

●三人に二人が運動不足を自覚
前号の当欄では「父親の権威の失墜」について触れたが、今回のデータをみる限り、スポーツを通じて父親の威厳を回復することは

左手に「四つの基本原則」という牙盾を抱えたままの今日の中国は、「社会主義市場経済」を進めれば進めるほど、将来の「不可避的衝突」のエネルギーを内部に蓄積することにならざるを得ない。

アメリカでは、日中友好の日本とは違って、鄧小平をサダム・フセインと同等に扱い、「バグダッドから北京までの無法者」と発言したクリントン氏が次期大統領に決つた。

（徳間書店 二〇〇〇円）

可能だと私はみる。父親が実際に男の子と遊んでいるスポーツは、「野球」（キャッチボールを含む）を筆頭に「水泳」「サッカー」と続くが、子供が父親とやってみたいと願っているスポーツの一位は、Jリーグの誕生ですます人気に拍車がかかってきた「サッカー」である。野球はそれでも二位に入っており、根強い人気を誇っている。次いで「水泳」「テニス」と続く。

女の子では「テニス」を抑えて「水泳」が父親とやりたいスポーツの一位だが、これは調査時期が関係している。つまり、バルセロナ五輪が開かれ、岩崎基子が金メダルを取った時期なのである。

この調査では、「一カ月にスポーツで体を動かす日数がゼロの父親が四人に一人」「三人に二人が運動不足を自覚している」というデータも出ている。ここはひとつ、子供たちのためにも「急発起して、スポーツしてみたいかがでしよう」と体を動かす日数ゼロの私が言っても説得力はないか……。

（作家・城島明彦）